

## 歴博 くらしの植物苑だより

第117回くらしの植物苑観察会 12月6日（土）

### サザンカの文化史

江戸の名花から海外に渡って里帰りしたサザンカまで

箱田 直紀（恵泉女子大学 名誉教授）

#### 1 野生のサザンカは白花

晩秋から初冬の庭先ではらはらと花を散り敷くサザンカは、日本で生まれ育てられた日本特産の花木です。園芸品種には桃色や紅色花、華やかな八重咲きの花などがありますが、そのもとになった野生のサザンカは、四国西南部や九州から沖縄にかけて自生し、10月から12月にかけて、直径7~8cm、6~7弁の一重咲きの白花を開きます。

#### 2 園芸サザンカは江戸時代に発達

江戸時代前期の1695（元禄8）年に刊行された「花壇地錦抄」には、〈茶山花のるひ〉として50品種が載せられ、また、1739（元文4）年に書かれた「本草花蒔絵」には100品種が図入りで解説されています。これらのことから考えて、自然の中に生じた変わりものが観賞植物として利用されるようになったのはこれよりかなり以前のことと考えられています。

実際に、自生地から離れた瀬戸内海の島々や沿岸部、京都や東海地方から関東までの各地の旧家や寺院には、樹齢が300年から400年と思われるような古木が多数存在します。それらの多くが野生ではほとんど見つからない桃色や紅色の花をつけます。おそらく初期の園芸種は花色変異個体の発見や植栽から始まったものと思われます。

これらの変わりものを集めて優雅な品種名をつけて商品化したのが江戸の植木産地であった染井（現在の駒込や巣鴨一帯）の園芸家・伊藤一族でした。これらの品種は、その後も関西や中部地方の品種などと相互移入が重ねられ、江戸後期の文化・文政期にはさらに変化に富んだ多数の園芸品種が作り出されました。

その後、幕末から明治にかけての動乱期には多くの品種が失われましたが、巣鴨に住んでいた芦沢弥五郎は市中、市外からサザンカの品種を集め、1898（明治31）年には95品種を載せた名鑑「茶梅花大集」を発行しました。ここに載せられた品種の多くが、埼玉県安行の皆川家に伝えられ、江戸サザンカの貴重なコレクションとして現在に引き継がれています。

#### 3 各地のサザンカ

サザンカに関する資料は江戸以外では少ないのでですが、大阪府池田市や兵庫県宝塚市、愛知県稻沢市、九州では久留米市周辺などで独特な品種が引き継がれ、古くから苗木が生産されていたようです。さらに、東海地方や長崎県平戸市などでは多くの古木がみつかっています。

また、今日広く栽培されている品種は、「富士の峰」「昭和の栄」「乙女サザンカ」「勘次郎（立寒椿）」「獅子頭」など重弁の華やかな品種が多いのですが、これらは1930年代以降に関西方面から販売されたもので、現在では各地に植えられ、苗の入手も容易です。

以上のはかに、熊本市には明治初期から発達した肥後サザンカ40数品種が伝えられ、肥後六花のひとつにあげられています。

#### 4 海外に渡ったサザンカ

サザンカがヨーロッパへ渡ったのは江戸時代末期とされ、1869年にフランスで出版された『Illustration Horticole』に載せられた紅色の一重花と白色の八重咲き花がヨーロッパにおける最初の導入記録であるといわれています。このサザンカは、その後も植物園などでは栽培が続けられましたが、園芸的にはほとんど利用されなかつたようです。

20世紀にはいるとサザンカもツバキとともにヨーロッパからアメリカ合衆国に渡り、1900年代はじめには輸出入業者などの手により日本からも数品種がアメリカへ渡りました。さらに、1950年頃までにはかなりの品種が日本から持ち込まれたようです。アメリカではこの頃から現在まで引き続いてサザンカの品種改良が進められ、1956年からはアメリカツバキ協会内にサザンカ実生賞が設けられて、作出された優秀新品種に賞が与えられるようになりました。1970年にカルフォルニアで出版された『How to Grow and Use Camellias』という本にはサザンカ78品種が載せられ、このうち48品種はアメリカをはじめとする国外で作出されたものですから、品種数の急激な増加がうかがえます。

1950年代からツバキやサザンカの栽培熱は南半球のオーストラリアやニュージーランドにも広がりました。両国の気候は常緑樹であるツバキやサザンカに適するため、他のどの地域より生育が早いといわれ、種苗生産者のカタログにもサザンカの品種が増加しています。

このように日本から渡ったツバキやサザンカの品種を基盤とした栽培ブームは、アメリカからフランス、ベルギー、イギリス、ドイツ、スペイン、イタリアなどのヨーロッパ諸国にも広がり、さらに南半球ではオーストラリアやニュージーランドだけでなく最近では南アフリカにまで広がっています。

しかし、サザンカの品種改良の中心はアメリカに次いで、オーストラリアとニュージーランドで、日本から渡った品種をもとに交配や実生が行われた結果、花弁数の多い複雑で華やかな品種がたくさん作り出されています。外国生まれのサザンカにはバラやツバキなどと同様に、多分奥方か恋人であろう女性の名前を冠したものが多いのですが、その一部はしばらく前から日本にも導入され、本苑でもいくつかの里帰り品種が育てられています。



サザンカの利用面では、秋から冬にかけての花の少ない時期の庭を彩る花木として、あるいは常緑樹として花のない期間でも楽しめる単植用の庭木としてばかりでなく、日本と同様に生垣としても用いられます。また、横張り性の強い品種は高木の株元を覆う根結めやボーダーとしても利用されます。近年は葉や樹形がコンパクトな品種は鉢物としても注目されるなど、品種の特性を生かした利用法を考えられるようになり、さらに一步進んで、それぞれの利用目的に適した品種の育成まで始まっています。



#### 次回予告

第118回くらしの植物苑観察会 2008年1月24日（土）

「武蔵野の平地林の保全」 犬井 正（獨協大学教授）

13:30～15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料